島根大学教育学部紀要（教育科学）第35巻　55頁～65頁　平成13年12月

高校生のホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動に関する実態と意識

多々納道子*・右田雅子**

Michiko TATANO and Masako MIGITA

The Conditions and the Opinions of "Home Projects" and "Future Homemakers of Japan" in the Shimane and Tottori Prefectures

［キーワード：ホームプロジェクト，学校家庭クラブ活動，課題解決学習］

ABSTRACT

The purpose of this study is to evaluate the programs (i.e. "Home Projects" and "Future Homemakers of Japan") implemented at various high schools within the Shimane and Tottori Prefectures. The evaluation includes the current conditions of the programs as well as the opinions of the participating high school students. Another purpose of this study is to obtain data pertaining to the examination of the possible state of future activity of this nature.

The results are as follows: In the rate of the "Home Projects" program, a distinct difference became apparent among the students in terms of their ability to understand the concepts being administered. As a whole, females were better able to understand the concepts of the program than males. Also, those in the vocational department were better able to understand the concepts of the program than those belonging to the normal department.

As for the "Future Homemakers of Japan" program, a similar difference was apparent among the participants in terms of understanding the program concepts. Those part of the "Home Club Executive" group were more inclined to grasp the stated concepts. Moreover, as within the "Home Projects" program, females tended to have a better understanding of the project concepts than males did. Very few students felt that the "Future Homemakers of Japan" program was of little use; therefore, they advocate the continuance of this activity.

Ⅰ．はじめに

激しく変化することが予想される21世紀の社会において，生徒一人一人が豊かに生きていくには，常に生活の中に生起する課題を見出し，自ら解決していく能力を身につけることが重要である[1]。このような能力は生きる力と表現でき，生活環境・文化の創造者の育成を目的とする家庭科で培う能力と極めて関わりが深い[2]。その目的達成には，家庭や地域社会との連携を密にして，課題解決的な学習や体験的な学習を取り入れることが強く求められる[3]。

高等学校家庭科では，学習成果を家庭や社会生活に生かすため，実生活における問題点を見出し，自ら解決し，生活改善・向上を図る学習方法として，ホームプロジェクト（以下，H.P.と称する）と学校家庭クラブ活動（以下，F.H.J. と称する）を取り入れてきた。H.P.が家庭内の問題を重点的に扱うのに対し，F.H.J. は，地域社会の生活向上を目的とする実践活動であり，両者が相互に関連しながら，家庭科の学習をさらに発展させるものになる[4]。 また，各々の学習過程は，個人の活動あるいは生徒同士が協力して行う協同活動からなるが，２つの学習活動は生徒の人間形成に必要欠くべからざるものである。

これらのH.P. とF.H.J. は，第２次世界大戦後の教育課程に，GHQ/SCAP（連合国軍最高司令官総司令部）のCIE（民間情報教育局）の指導の下に取り入れられ，学校・家庭・地域社会を連携する主体的な学習活動として，まさに時代を先取りして実践されてきたといえる[5]。

しかし，教育意義の大きいことは明らかであるが，先行研究によれば，H.P. は，個人指導やきめ細かな指導

*島根大学教育学部家政教育研究室
**元島根大学大学院教育学研究科

が十分に出来ないことや取り組みが形骸化しているなどの問題点[6) 7)]がある。また，F.H.J. では，役員中心の活動になる傾向があり，生徒の主体的な活動になり難いことや活動日程そのものを組むことが難しくなっているなど，F.H.J.本来の活動が出来にくくなっているとの指摘がある[8) 9)]ことから理解できるように，特に方法上に検討すべき多くの課題が存在すると考えられる。

そこで，本研究は高等学校家庭科におけるH.P. とF.H.J. 活動の今後のあり方を検討するため，1998（平成10）年度に全国高等学校家庭クラブ連盟への加盟率が島根県90.6%，鳥取県81.0%と相対的に高率である，両県の高校生のH.P. とF.H.J. に関する実態と意識を明らかにすることを目的とした。

Ⅱ．研究フレーム

本研究では，高校生のH.P. とF.H.J. に関する活動実態と意識を把握することとする。これらは性別，所属する学科や家庭クラブ役員か否かの属性に規定されると考えられるので，研究フレームを図１のように設定した。

Ⅲ．調　査

方法は，質問紙法によるアンケート調査によった。

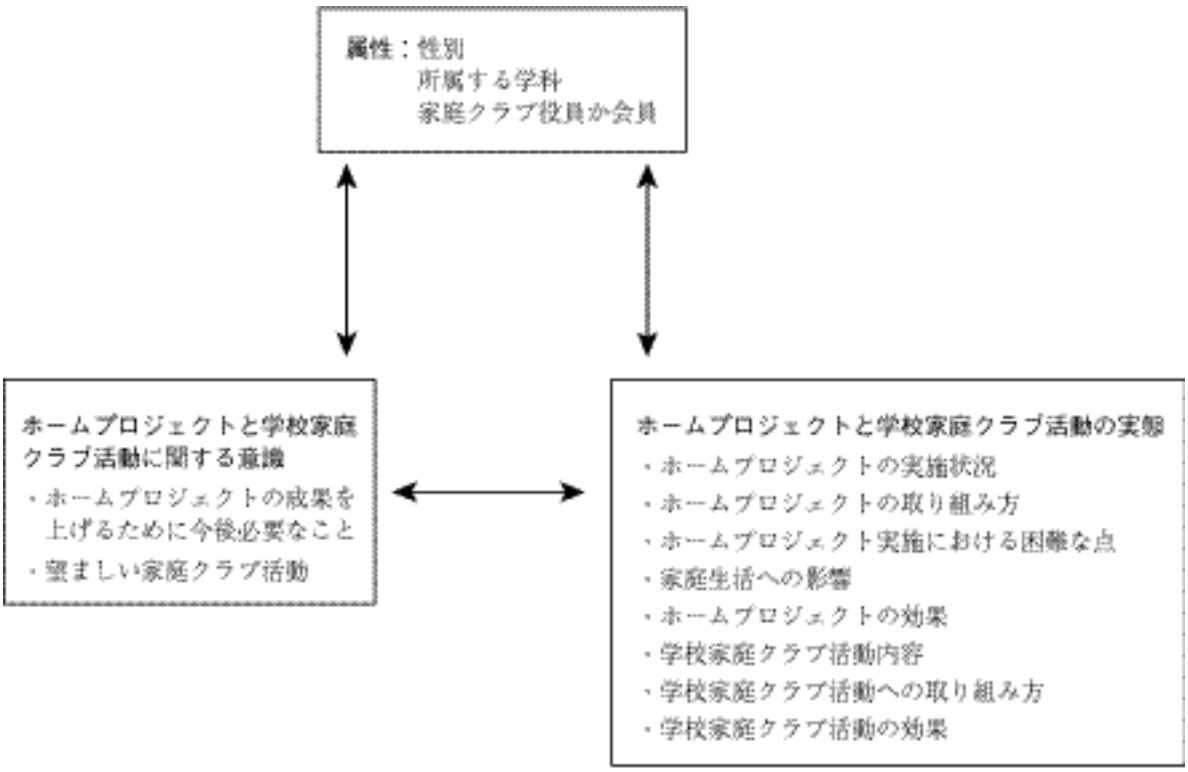

図１　研究フレーム

第１の調査対象は，島根県と鳥取県の高等学校家庭クラブ連盟指導者養成講座に参加した各学校の家庭クラブ役員男子12人，女子102人で，有効回収率は100.0%であった。

第２は，島根・鳥取両県内の普通科と職業科のある高校各１校ずつ計4校の男女の家庭クラブ会員とした。有効回収率は96.4%となり，男子148人，女子345人，計493人を分析の対象とした。

調査は，家庭クラブ役員については，1998（平成10）年８月中旬に開催された高等学校家庭クラブ連盟指導者養成講座終了後に，家庭クラブ会員については，同年９月下旬から10月中旬に，各学校の家庭科担当教員の下で実施した。

H.P.に関しては，主に男女と学科間で，F.H.J. については，男女，家庭クラブ役員と家庭クラブ会員間および学科間で比較検討した。

Ⅳ．結果及び考察

１．H.P. の実施状況

H.P. は，調査対象の全校で実施されていたが，「実施経験あり」と答えた生徒は，全体の９割に満たなかった。このことから，H.P. は，各学校で実施されているものの，「実施経験あり」と明確に答えられるように主体的に取り組まなかった生徒がいることを示した。このような生徒は，女子よりも男子の方に２倍以上も多く見られ，H.P. を実施した段階で，すでに取り組み方に男女差が生じているといえる。

次に，実施学年をみると，普通科は，１年時に83.0%，職業科では２年時に76.9%と学科によって特定の学年に偏る傾向が見られた。これは，調査対象の島根と鳥取県の普通科では家庭科を1・2年時に，職業科では2・3年時に履修する傾向があり，H.P. は，各履修段階の初年度に位置づけられることによるものであると考えられる。全体的には１年時に53.8%，２年時に44.0%とほぼ半々に分かれ，家庭科の履修学年との関連性を示した。

さらに，全ての生徒が夏休みを利用して，課題の一端としてH.P. を行っていた。1960（昭和35）年の高等学校学習指導要領の改訂により，家庭科はそれまでの男女選択から女子必修になり，H.P.に多くのものが取り組むようになったことから，教員や生徒用の指導の手引きや解説書が出版された[10) 11)]。それらの中では，夏休みを利用した実施形態が推奨されており，これ以降，夏休みを含めて活動することが一般的になったと言われている[12)]。家庭生活中心となる夏休みは，個々人や各家庭での固有の課題を見つけ，実施しやすいことから，今日でも夏休みを利用してプロジェクトに取り組むという形態になっているものと考えられる。ただ，夏休みには教員からの指導を受けることが困難になるので，実りある成果を達成するには，プロジェクトとして家庭科と家庭での学習活動をいかに連携するかが課題となる。

２．H.P. の実施内容

実施内容をまず，男女間で比較すると，表１に示すように男子生徒は，「生活環境」（26.9%）と「食生活」（25.6%）に関するテーマを設定したものがほぼ同じで最も多く、次いで，「住生活」（11.7%）の順であった。それに対し，女子生徒では「食生活」（47.5%）がほぼ半数を占めた。次いで，「生活環境」（14.7%），「住生活」（11.7%）であった。このように，男子は「食生活」とともに「生活環境」に強い関心をもつのに対して，女子は「食生活」に集中する傾向が認められ，χ^2検定の結果，１%の危険率で有意差が認められた。

全体的な傾向としてまとめると，「食生活」に関するものが最も多く41.7%を占めた。高校生は心身の発達期にあって，食生活への興味・関心や学習意欲が他領域に比較して高く[13)]，また家族の発達段階や健康状態によっては，特に食生活が重要となるので，家庭内の問題解決に重点がおかれるH.P.では，取り上げやすい内容であると考えられる。また，「生活環境」については，私たちがどのような生き方をするか、ライフスタイルをどう設定するかによってとる生活活動が、生活環境問題の発生に深く関わっていることと国民全体で取り組むべき現代的課題という点からも，ホームプロジェクトとして取り上げやすかったものと思われる。

その他，生徒が自主的に取り組んだ内容は，数はそれほど多くはないが，高齢化問題なども見られた。したがって、高校生が現代の社会と家庭生活に関わる問題に強い関心をもち，課題解決を求めて，プロジェクトとして取り組んだことが伺えた。

表１　ホームプロジェクトの実施内容

%（人数）

	男　子	女　子	合　計
食生活	25.6（40）	47.5（207）	41.7（247）
衣生活	5.8（9）	8.7（38）	7.9（47）
住生活	12.8（20）	11.7（51）	12.0（71）
保育	0.6（1）	2.8（12）	2.2（13）
生活環境	26.9（42）	14.7（64）	18.0（106）
家庭経済	3.8（6）	2.1（9）	2.5（15）
家族と家庭経営	3.2（5）	3.2（14）	3.2（19）
その他	5.8（9）	5.3（23）	5.4（32）
無回答	15.4（24）	4.1（18）	7.1（42）
合計	100.0（156）	100.0（436）	100.0（592）

$\chi_{0.01}^2 = 20.1 < 48.5 = \chi^2$，df＝8

３．H.P. の取り組み方

H.P. の取り組み方について，男女別，学科別にその違いを明らかにし，結果を表２に示した。

男子で最も多いのは，「あまり積極的に取り組まなかった」（36.1%）であり，これに「全然積極的に取り組まなかった」（14.2%）を合わせると50.3%となり，半数の者は積極的に取り組まなかったといえる。これに対して，女子は，「やや積極的に取り組んだ」（47.5%）が最も多く，これに「非常に積極的に取り組んだ」（12.2%）

を合わせると59.7%であった。男女間では，積極的に取り組んだとあまり積極的に取り組まなかったとするものの割合が対照的であった。両者の間での差異を明らかにするため，χ^2検定を行ったところ１%の危険率で有意な差が認められた。

このように，H.P.の実施状況に加えて，取り組み方にも男女差があったことは，総じて積極性の低い男子に関して重点的な指導が必要なことを示している。

次に普通科と職業科の生徒の取り組み方を比較検討した。普通科の生徒の特徴としてあげることができるのは，「あまり積極的に取り組まなかった」（36.7%）と「やや積極的に取り組んだ」（31.0%）が多くを占めたことである。しかし，「あまり積極的に取り組まなかった」と「全然積極的に取り組まなかった」を加えると51.3%，「やや積極的に取り組んだ」と「非常に積極的に取り組んだ」を合わせると39.8%というように，H.P.へは，積極的に取り組まなかったものの方が多いという結果を示した。

職業科の生徒では，「やや積極的に取り組んだ」が過半数で，これに「非常に積極的に取り組んだ」を合わせると，積極的に取り組んだとするものは64.3%と約2/3を占めた。したがって，χ^2検定を行うと，普通科と職業科の生徒の間には，１%の危険率で有意差があり，職業科の生徒の方がより一層積極的に取り組んだ傾向が認められた。

このように所属する学科によって取り組み方に差が生じた理由として，教育課程の違いが考えられる。普通科では，「家庭一般」のみを学習する生徒が大部分であるのに対し，職業科では「家庭一般」を履修した上にさらに家庭に関する科目を履修するなど，より深く学習できるようになっていることが多い。そのため，家庭生活における生徒の問題意識も高いことが予想され，H.P. に積極的に取り組むことを促したものと考えられる。

家庭科の学習を基礎として，現実の家庭生活の問題に応用し，解決することを特徴とするH.P. は，まさに生きる力を育成するにふさわしい学習方法である。今日の教育課程では，家庭科以外にはこのようなプロジェクト法はほとんど取り入れておらず，家庭科の独自性を示すものであり，重要な意義をもつものである。したがってH.P. の重要性を理解し，積極的な取り組みを促すためには，学校での基礎的な学習と家庭生活での応用をうまく接続できるように指導することが必要である。そのためには，ホームプロジェクトの学習開発など実践的な研究が求められる。

また，調査対象の普通科では，高等教育への進学率が90%を越えて極めて高かった。先行研究で明らかなように[14]，生徒の家庭生活への関心の低さとともに，学歴重視社会の中で家族は、生徒達が家事参加や家事に関する問題解決学習をすることにそれほど意義を認めないことによるものと考えられる。

したがって，H.P. の取り組みを通して家庭生活を営むという主体性を育成できるよう，H.P. の実施例を多く準備し、種々の取り組みが可能であることを理解させることが必要となろう。

４．H.P.実施における困難な点

H.P.に実際に取り組んでみて，どのような取り組み難い点があったのかをみると，男女差はほとんどなかった。全体で最も多かったのは，「テーマの設定の仕方」（23.8%）で，次いで「まとめ方」（22.6%），「計画の立て方」（20.8%），「計画通りに進めること」（17.2%）の

表２　ホームプロジェクトの取り組み方

%〈人数〉

	男　子	女　子	普通科の生徒	職業科の生徒
非常に積極的に取り組んだ	10.3〈16〉	12.2〈51〉	8.8〈20〉	15.0〈40〉
やや積極的に取り組んだ	25.2〈39〉	47.5〈199〉	31.0〈70〉	49.3〈129〉
あまり積極的に取り組まなかった	36.1〈56〉	28.2〈118〉	36.7〈83〉	25.1〈67〉
全然積極的に取り組まなかった	14.2〈22〉	8.1〈34〉	14.6〈33〉	6.4〈17〉
無　回　答	14.2〈22〉	4.1〈17〉	8.8〈20〉	5.2〈14〉
合　　計	100.0〈155〉	100.0〈419〉	100.0〈226〉	100.0〈267〉
	$\chi_{(2)}^2=13.3<37.7=\chi^2$ df＝4		$\chi_{(2)}^2=13.3<28.8=\chi^2$ df＝4	

順であった。「家族の協力を得ること」や「経済的なこと」を難しかったとするのは，２～３％に過ぎなかった。

ここに取り組み難い点として挙げられているのは，ホームプロジェクトの方法そのものに関わる諸点である。ホームプロジェクトのようなプロジェクト法は，ほとんど体験してこなかったという生徒のこれまでの学習経験を踏まえると当然の結果かもしれない。したがって，生徒の実態をふまえてホームプロジェクトの取り組み方や進め方そのものを，重点的に指導する必要があると考える。

さらに，全国高等学校家庭クラブ研究発表会の発表者と教員養成大学の学生を対象にしたH.P. の取り組みについての調査[15) 16)] によると，題目決定に際して，教員に相談したものはしなかったものと比較して，H.P. を「今後も積極的に実施すべき」と捉えるものが多く，教員の指導の有無とH.P. の評価とは関連性のあることが明らかにされていた。

これらのことから，H.P. の成否の鍵は，教員が指導できるか否か、教員のきめ細かな指導を保障できるかにあるといえる。したがって，夏休みと連携した実施方法では，教員の指導をいかに位置づけていくかを検討することが課題となる。あるいは、夏休みと連携した方法を見直し、むしろ総合的な学習の時間と連携させて，発展させるということを検討する必要があると考える。

５．家庭生活への影響

H.P. は家庭生活を向上させるためのプロジェクト活動である。そこで，生徒達が実際に取り組むことによって，家庭生活にどのように成果があったとみなしているのかを明らかにした。

表３からみて，「生活向上にやや役に立った」とするものが男子（37.7%），女子（47.5%）と男女ともに最も多かった。これに「非常に役に立った」を合わせると，男子で43.5%，女子では52.8%と約半数がH.P. に取り組んだことは役に立ったとしていた。しかし，同時に女子では，「あまり役に立たなかった」（30.8%）も多く，これに「全然役に立たなかった」（12.2%）を合わせると，43.0%を占めた。男子においても，「あまり役に立たなかった」（21.4%）と「全然役に立たなかった」（20.1%）はほぼ同じ値で，合わせると41.5%になった。このように，男女ともH.P. は家庭生活を向上させるのに役に立ったとするものの方が多いが，役に立たなかったとするものとは，男子では僅差であった。χ^2検定により，男女間で１%の危険率で有意差が認められ、男子よりも女子の方が役に立ったとするものが多いといえる。Ⅳ.3 H.P. の取り組み方において，女子の方がH.P.に積極的に取り組んでいることが明らかになっており，積極的に取り組むことが家庭生活への成果をもたらす一因となったものと考えられる。

さらに普通科と職業科の生徒を比較すると，職業科の生徒は家庭生活への効果を認めているものが60%近いのに対して，普通科の生徒では，40.7%と半数にも満たなかった。χ^2検定の結果，１%の危険率で有意差が認められ，H.P. への取り組み方が積極的であった職業科の生徒の方が，効果を肯定的に捉えていることが明らかになった。

６．H.P.の効果

H.P.による学習効果を進路，生活態度，自己認識などに関する８つの側面から測定した。それぞれについて「非常に思う」（４点），「ややそう思う」（３点），「あまりそう思わない」（２点），「全然そう思わない」（１点）の４段階評定尺度によって得点化し，検討を行った。

表４は，各項目について男子と女子，普通科と職業科における平均得点を示したものである。

表３　家庭生活への影響

%〈人数〉

	男　子	女　子	普通科の生徒	職業科の生徒
生活向上に非常に役に立った	5.8〈9〉	5.3〈22〉	5.3〈12〉	6.7〈18〉
やや役に立った	37.7〈58〉	47.5〈199〉	35.4〈80〉	53.7〈143〉
あまり役に立たなかった	21.4〈33〉	30.8〈129〉	27.9〈63〉	27.3〈73〉
全然役に立たなかった	20.1〈31〉	12.2〈51〉	22.1〈50〉	6.7〈18〉
無　回　答	14.9〈24〉	4.3〈18〉	9.3〈21〉	5.6〈15〉
合　　計	100.0〈155〉	100.0〈419〉	100.0〈226〉	100.0〈267〉
	$\chi^2_{(0)}=13.3<28.8=\chi^2$,df=4		$\chi^2_{(0)}=13.3<32.6=\chi^2$,df=4	

いずれの群でも，特に高い得点を示したのは，「自分自身の生活を見直すよい機会になった」と「やってよかったという満足感が得られた」であった。生活の中から問題点を見つけ，取り組むというH.P. 本来の特徴からもたらされた効果が表れたものと考えられる。これらの得点は，男子より女子生徒の方が，普通科より職業科の生徒の方が，高い傾向を示した。

「生活態度が意欲的になった」「家族に対する思いやりが持てるようになった」や「家庭科が好きになった」というような生活態度や家族への心情，家庭科の好嫌に関する項目は，どの群も比較的高い得点を示したことから，H.P.を実施することによって，生活態度や家庭科を好きになるというような面には，特にプラスの効果をもたらしたことが分かった。

「今後の進路に影響をもたらした」と「さらに家庭生活に対する課題に取り組む意欲が出た」については，得点が低く，進路決定や家庭生活に関する課題解決への意欲を十分に高めることにはつながらなかったようである。

以上のような項目間の得点差を明らかにするためｔ検定を行ったところ，男女間では「生活態度が意欲的になった」が５％の危険率で，「家族に対する思いやりが持てるようになった」「やってよかったという満足感が得られた」「家庭科が好きになった」は，１％の危険率で有意差があり，男子よりも女子の方により一層効果があらわれたといえる。

学科間においては，「自分自身の生活を見直すよい機会になった」以外の全ての項目で，１％の危険率で有意差がみられ，普通科よりも職業科の生徒の方がより効果があったと理解していることが明らかとなった。

表４　ホームプロジェクトの効果

〈点〉

	男　子	女　子	t　値	普通科の生徒	職業科の生徒	t　値
今後の進路に影響をもたらした	1.5	1.7	2.62**	1.5	1.8	3.26**
生活態度が意欲的になった	1.8	2.1	2.54*	1.8	2.1	3.36*
自分自身の生活を見直すよい機会になった	2.5	2.6	0.87	2.5	2.6	0.30
自信がつき、物事に積極的に取り組めるようになった	1.8	2.1	3.57**	1.7	2.1	5.34**
家族に対する思いやりがもてるようになった	2.1	2.3	3.04**	2.0	2.4	5.93**
やってよかったという満足感が得られた	2.3	2.7	3.29**	2.3	2.7	4.20**
家庭科が好きになった	1.8	2.3	6.00**	1.9	2.2	4.50**
さらに家庭生活に関する次の課題に取り組む意欲が出た	1.8	2.0	3.23**	1.8	2.0	3.02**

*…p<0.05，**…p<0.01

これらのことから，H.P. の効果のとらえ方は，男女と学科間では異なる傾向があるといえる。

７．H.P. の成果を上げるために今後必要なこと

H.P. の成果をさらに上げるために，今後必要になる手だてを明らかにする目的で，資料、家族の協力や指導の機会などに関する設問を設け，H.P. の効果を明らかにしたと同様に，４段階評定尺度によって得点化し，検討を行った。

表５は，各項目についての男女生徒と学科別にみた平均得点を示したものである。「もっと時間があるとよい」は男女同一の得点であったが，これ以外は，男子よりも女子の方が，普通科よりも職業科の生徒の方が高い得点を示した。

全体的にみて，高得点を示したのは，「参考資料」と「活動時間の確保」であった。この結果から，H.P. を実施する際の参考資料が少なく，また，比較的時間にゆとりのある夏休みでさえも，H.P. に充てる時間を思うように確保できなかったことが分かった。したがって，プロジェクト計画を十分検討すること、夏休み中のプロジェクト活動であっても教員からの指導が可能な体制を整える必要があると考える。先行研究には，課題設定の仕方を工夫することや家庭科の時間と夏休みとをうまく連携させて研究計画を立てることによって，生徒が意欲的に取り組んだという実践事例がみられるので，参考になる[17]。

これらの結果について，男女間でｔ検定を行ったところ，「教員から指導を受ける機会」が５％，「家族の協力」が１％の危険率で，有意な差が見られた。これら以外の項目では，有意差はなく，H.P. の成果を上げるために何が必要かの理解には男女間であまり差がないといえる。

また，普通科と職業科間においても，「家庭科の時間での取り組み」が５％の危険率で有意差が認められたが，

表５　ホームプロジェクトの効果をあげるために今後必要なこと

（点）

	男　子	女　子	t　値	普通科の生徒	職業科の生徒	t　値
参考資料	3.0	3.1	1.73	3.0	3.1	0.53
家族の協力	2.3	2.6	2.75**	2.5	2.5	0.35
実施中の友達の様子を知る機会	2.4	2.6	1.72	2.4	2.5	1.02
教員から指導を受ける機会	2.5	2.7	2.00*	2.5	2.6	1.53
家庭科の時間での取り組み	2.5	2.6	1.23	2.4	2.7	2.50*
活動時間の確保	2.9	2.9	0.87	2.8	2.9	1.32

*…p<0.05

これら以外の項目には，顕著な差はなかった。

以上まとめると，H.P. 実施状況，取り組み方，家庭生活への影響や効果については，男女生徒間および学科間で差異があったが，H.P. の成果をあげるために今後必要なことに関しては，ほぼ共通のとらえ方をしているといえる。したがって，参考資料の準備や活動時間の十分な確保は，H.P. の活動を活性化するために必須の要素と考えられる。

８．学校家庭クラブ活動の内容

学校家庭クラブ活動状況を表６よりみると，種々の活動が行われていることが理解できる。その活動内容として全体的に最も高い割合を示したものは，「リサイクル活動」であった。「リサイクル活動」においては，身近な自分達の生活を見直すことから始める必要があり，問題意識を喚起できる。そのため，生徒達にとって取り組みやすいものと考えられる。また生涯学習としての現代的な課題である環境に関わる活動でもあるため，今後一層重視し，積極的に取り上げていくとよいと思われる。次いで多かったのは，「交流活動」だった。島根県の各高等学校の家庭クラブ週間における活動調査によると[18]，老人ホームや乳幼児施設への訪問等交流活動は，最も多くの学校で実施されており，F.H.J. を代表する活動ともいえるものである。それゆえ，他の活動と比較して積極的に取り組んだものと思われる。

家庭クラブ役員と家庭クラブ会員とでは，リサイクル活動のみ家庭クラブ会員の活動割合が多いものの，他の活動はいずれも家庭クラブ役員が多く，依然として役員中心の活動になっていることが理解できた。

さらに，いずれの活動にも「参加したことがない」については，家庭クラブ役員は皆無であったのに対し，家庭クラブ会員については，38.9%と４割近くを占め，名目上の会員が非常に多いということになる。したがって、現在役員の活動を主として展開されている家庭クラブ活動を，誰もが参加できるように活動内容や方法の工夫をする必要がある。その前提となるのは、学校家庭クラブ活動の意義を十二分に理解することは、いうまでもないことである。

表6　学校家庭クラブ活動状況（複数回答）

%（人数）

	家庭クラブ役員	家庭クラブ会員	全　体
美化活動	10.4（31）	6.3（37）	7.7（68）
交流活動	22.6（67）	9.9（58）	14.1（125）
総会等への参加	12.8（38）	10.2（60）	11.0（98）
学園祭での展示	12.8（38）	5.6（33）	8.0（71）
講習会	18.2（54）	2.2（13）	7.5（67）
リサイクル活動	14.5（43）	20.9（123）	18.7（166）
交通安全活動	0.7（2）	0.5（3）	0.6（5）
募金活動	4.0（12）	3.9（23）	4.0（35）
その他	4.0（12）	1.5（9）	2.4（21）
参加したことがない	0（0）	38.9（229）	26.0（230）
合　計	100.0（297）	100.0（588）	100.0（887）
	$\chi_{(0.01)}^2=21.7<232.7=\chi^2$，df＝9		

９．学校家庭クラブ活動への取り組み方

表7に示したように，学校家庭クラブ役員においては，「非常に積極的に取り組んだ」（51.8%）が最も多く，これに「やや積極的に取り組んだ」を合わせると，79.0%と約８割を占めた。これに対し，家庭クラブ会員では，「やや積極的に取り組んだ」（26.7%）と「あまり積極的に取り組まなかった」（26.2%）がほぼ同じ割合で，「あまり積極的に取り組まなかった」と「全然積極的に取り組まなかった」を合わせて43.5%と半数近くを占めた。χ^2検定の結果，家庭クラブ役員と家庭クラブ会員の間に１%の危険率で有意差が見られた。

男子では，「やや積極的に取り組んだ」（19.4%）と「あまり積極的に取り組まなかった」（19.4%）が同率であるが，「全然積極的に取り組まなかった」ものが「非常に積極的に取り組んだ」ものの約2倍を占めた。これに対し，女子では「やや積極的に取り組んだ」（38.3%）

が最も多く，これに「非常に積極的に取り組んだ」（14.4%）を加えると半数以上の生徒が積極的に取り組んだことになる。

学科間で比較検討したところ，普通科の生徒については「あまり積極的に取り組まなかった」（25.7%），「全然積極的に取り組まなかった」（25.2%）が最も多く，合わせると約半数を占め，参加しても積極的に取り組まない傾向にあることが明らかとなった。職業科については，「やや積極的に取り組んだ」（26.2%）が最も多い割合を示した。χ^2検定の結果，１%の危険率で有意差が認められ，普通科の生徒より職業科の生徒の方が，積極的に取り組んでいることが明らかになった。

以上のように，学校家庭クラブ活動への取り組み方は，群間で違いがあり，家庭クラブ役員，女子，職業科の生徒の方がより一層積極的に取り組んでいた。さらに，F.H.J.とH.P.への取り組み方との関連を明らかにするため，相関分析を行ったところ，5%水準の相関が認められ，H.P.に積極的に取り組んだ生徒は，F.H.J.へも積極的に取り組んでいたことが分かった。

積極的に取り組む生徒を増やすにはF.H.J.に取り組んでいることが実感できるような主体的な活動の工夫と，中学校家庭科での学習経験が女子に比べて少なく，家庭生活への役割期待が低い男子生徒が，意欲を持って取り組めるような工夫が必要となる。

10．学校家庭クラブ活動の効果

学校家庭クラブ活動によってどのような学習効果が得られたかを明らかにするため，進路，生活態度や積極性などに関して８項目の設問を設け，４段階評定尺度によって得点化し，検討を行った。

表８は，家庭クラブ役員と家庭クラブ会員，男女生徒の平均得点を示したものである。

表７　学校家庭クラブ活動への取り組み方

%（人数）

	家庭クラブ役員	家庭クラブ会員	男　子	女　子	普通科の生徒	職業科の生徒
非常に積極的に取り組んだ	27.2（31）	7.9（31）	7.5（12）	14.4（50）	2.7（6）	4.1（11）
やや積極的に取り組んだ	51.8（59）	26.7（105）	19.4（31）	38.3（133）	19.9（45）	26.2（70）
あまり積極的に取り組まなかった	10.5（12）	26.2（103）	19.4（31）	24.2（84）	25.7（58）	11.6（31）
全然積極的に取り組まなかった	4.4（5）	17.3（68）	15.6（25）	13.8（48）	25.2（57）	8.2（22）
無　回　答	6.1（7）	21.9（86）	38.1（61）	9.2（32）	26.5（60）	49.8（133）
合　　計	100.0（114）	100.0（393）	100.0（160）	100.0（347）	100.0（226）	100.0（267）
	$\chi_{0.01}=13.3<75.8=\chi^2$ df＝4		$\chi_{0.01}=13.3<67.7=\chi^2$ df＝4		$\chi_{0.01}=13.3<55.2=\chi^2$ df＝4	

群別に得点の差があるものの，いずれの対象者においても同じような傾向を示し，またいずれの項目においても，家庭クラブ会員より家庭クラブ役員の方が，男子より女子生徒の方が高い得点を示した。中でも高い得点を示した項目は，「やってよかったという満足感が得られた」と「もっとたくさんの活動に参加してみたいと思うようになった」であった。

これらの項目において，比較的高い得点を示したことから，学校家庭クラブ活動に参加することによって，地域に貢献したという満足感や達成感を味わうことができたと考える。

しかしながら，「今後の進路に影響をもたらした」と「家庭科が好きになった」では，それほど高い得点ではなかったことから，進路の決定や教科の好嫌については，強い影響を与えるような活動になっていないといえる。

ｔ検定の結果，家庭クラブ役員と家庭クラブ会員間においては，すべての項目で１%の危険率で有意差がみられ，家庭クラブ会員より家庭クラブ役員の方が，活動による効果が大であると理解していることが明らかとなった。また，男女間においては，「地域の一員として自覚が持てるようになった」については５%，それ以外の全ての項目については１%の危険率で有意差が見られ，男子よりも女子生徒の方が総じて効果があったとしているといえる。

これらのことから，家庭クラブ活動の効果は，家庭クラブ役員であるか否かと，男女に大きく関係し，F.H.J.への取り組み方とも大きく関係していることが分かった。普通科と職業科の生徒間では，いずれの項目も，職業科の生徒の方が高い得点を示し，ｔ検定の結果，全て

の項目で有意差が認められ，普通科より職業科の生徒の方がより効果があったと理解していた。

以上の結果から,参加経験のない生徒への対応として，誰もが一度は活動できる体制を整えたり，各学校の実態に即して，活動の内容や方法を一層工夫していく必要がある[18]。また，教師からの働きかけや情報提供も，F.H.J.を活性化し，効果を高める上で必要不可欠であると考える。

11．望ましい学校家庭クラブ活動の条件

望ましい学校家庭クラブ活動の条件を明らかにするため，活動内容や方法，活動時間などに関する設問を設け，それぞれの項目について，４段階評定尺度によって得点化し，検討を行った。

表８　学校家庭クラブ活動の効果

（点）

	男　子	女　子	t　値	家庭クラブ会員	家庭クラブ役員	t　値
今後の進路に影響をもたらした	1.6	2.0	4.35**	1.8	2.2	4.49**
生活態度が意欲的になった	1.9	2.2	2.98**	2.1	2.5	6.21**
自信がつき、物事に積極的に取り組めるようになった	1.8	2.2	4.34**	1.9	2.6	8.16**
地域の一員として、自覚がもてるようになった	1.9	2.1	2.49**	2.0	2.4	5.44**
地域に対する思いやりが持てるようになった	2.1	2.5	4.06**	2.2	2.9	7.63**
やってよかったという満足感が得られた	2.2	2.7	5.67**	2.3	3.2	10.04**
家庭科が好きになった	1.7	2.2	5.03**	1.9	2.7	8.04**
さらに家庭生活に関する次の課題に取り組む意欲が出た	1.9	2.5	5.42**	2.1	3.1	9.84**

*…p<0.05，**…p<0.01

表９は，家庭クラブ役員と家庭クラブ会員，男女生徒の平均得点を示したものである。

平均点から判断して全体的に家庭クラブ員より家庭クラブ役員の方が，男子生徒より女子生徒の方が高い得点を示した。ただ，「現状のままでよい」と「活動内容を減らしていくべきだ」は他の項目と比較して，かなり得点が低く，しかも群間で差異はないことから，学校家庭クラブ活動を縮小したり，現状の活動ではなく改善して継続していくという点については，一致した考えを持っているといえる。

家庭クラブ役員では，「活動を活発化し，生徒全体の活動になるようにしていくとよい」（3.4点）において，他の群に比して高得点を示したことから，学校家庭クラブ活動をより活性化していこうとする意欲が伺えた。

また，いずれの群においても，「家庭クラブ活動を通して地域社会に貢献していくことは必要だ」と考えている生徒が多く，「ボランティア活動を増やしていくとよい」や「生活環境に関する活動を増やしていくとよい」で高い得点を占めたことから，具体的活動としてボランティア活動や，環境に配慮した活動を考えていることが分かった。

ｔ検定の結果，男女間においては3項目に有意な差が見られた。家庭クラブ役員と家庭クラブ会員間においては「現状のままでよい」以外の全ての項目で，１％の危険率で有意差が見られ，家庭クラブ役員の方が，今後の活動をより推進していこうとする積極的な考えを持っていることが理解できた。

学科間においては，いずれの項目において普通科より職業科の生徒の方が高い得点を示した。ｔ検定の結果，活動を活発化し，生徒全体の活動になるようにしていくとよい」は５％，「家庭クラブの存在をアピールし，理解を深めていくとよい」においては，１％の危険率で有意差がみられたが，それ以外の項目については有意な差

表9　望ましい学校家庭クラブ活動の条件

（点）

	男　子	女　子	t　値	家庭クラブ会員	家庭クラブ役員	t　値
活動を活発化し、生徒全体の活動になるようにしていくとよい	2.5	2.8	3.82**	2.6	3.4	8.93**
もっと工夫したり、やり方を変えれば時間がなくても活発になる	2.7	2.8	1.58	2.7	3.2	5.96**
家庭クラブ活動を通して、地域社会に貢献していくことは必要である	2.9	3.0	1.04	2.9	3.3	5.49**
家庭クラブの存在をアピールし、理解を深めていくとよい	2.6	3.0	4.31**	2.7	3.4	7.97**
ボランティア活動を増やしていくとよい	2.8	3.1	3.49**	3.0	3.3	3.50**
生活環境に関する活動を増やしていくとよい	2.8	2.9	1.49	2.8	3.2	5.37**
授業でできない活動を増やしていくとよい	2.9	3.0	1.63	2.9	3.3	4.76**
現状のままでよい	2.0	2.1	0.72	2.1	2.0	1.95
活動内容を減らしていくべきだ	1.9	1.9	−0.09	1.9	1.7	2.19

*…p<0.05，**…p<0.01

は見られず，学科間による意識の差はほとんどないといえる。

Ⅴ．まとめ

本研究によって，島根・鳥取両県の高校生は，H.P.とF.H.J. に対して，かなり積極的な捉え方をしていることが分かった。

H.P. に関しては，男女間および学科間において，取り組み方や意識などで顕著な差があることが明らかになった。F.H.J. に関しては，家庭クラブ役員と会員間および学科間において，取り組み方において差が見られたが，今後の家庭クラブ活動に関する意識においては，有意な差が見られず，家庭クラブ活動を減らした方がよいと考えている生徒は極めて少なかった。

今後，H.P. とF.H.J. をより活性化していくためには，まず、基礎としての学習である家庭科において、男女がともに問題意識をもち、主体的に学習できる工夫が一層求められる。その上で、H.P. に取り組む問題意識を高める働きかけや，実施体制の充実を一層図る必要がある。F.H.J. に関しては，家庭クラブ役員の方によい活動傾向が見られたことから，一人一人が役割意識をもてるような組織作りや活動を計画することが必要であると思われる。そして，比較的関心の高かったボランティア活動や生活環境に関する内容を増やすとか，その内容を工夫するなどの方策を考えることが必要であると考える。また，　学校全体でH.P.やF.H.J.活動の重要性についての理解を深めるためのP.R.を積極的に行うとか、理解を深めることによって、各学年全体あるいは学校全体で取り組めるような特設の時間を設けることを提案することが必要になると思われる。

参考文献

１）中央教育審議会：「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（中央教育審議会 第1次答申）」，1996
２）日本家庭科教育学会編著：『家庭科の21世紀プラン』，家政教育社，pp.11～36，1997
３）教育課程審議会：「教育課程の基準の改善の基本方向について」1998
４）全国高等学校家庭クラブ連盟：『FHJ　GUIDE BOOK』，（財）家庭クラブ，pp.４～８，1998

５）新福祐子：「教育方法としての家庭クラブ」，日本家庭科教育学会誌，25.1，pp.97～103，1982
６）二宮喜美恵：「高等学校家庭一般におけるホームプロジェクトの現状と課題（第２報）」，大分大学教育学部研究紀要6.2，pp.41～51，1981
７）安藤美紀子他：「高等学校家庭科ホームプロジェクトに対する意識（第２報）」，日本家庭科教育学会誌27.3，pp.26～31，1984
８）牛島倫子：『ＦＨＪ』６月号，全国高等学校家庭クラブ連盟，1996
９）香川実恵子：「体験学習を通して「生きる力」を育てる家庭クラブづくり」，家庭科教育73.4，pp.63～69，1999
10）仙波千代：『HPとFHJを指導するために』，家政教育社，1963
11）松本喜美子・大和マサノ：『新しいホームプロジェクトと学校家庭クラブ』，家政教育社，1963
12）伊波富久美：「わが国における家庭科ホームプロジェクトの変遷」，長崎大学教育学部教科教育学研究報告，第12号，pp.83～91，1988
13）二宮喜美恵：「高等学校家庭科におけるホームプロジェクトについて（第２報）」，日本家庭科教育学会誌26.2，pp.63～68，1983
14）伊波富久美：「家庭科教育における問題解決に関する研究」，中国四国教育学会，教育学研究紀要　第二部，第32巻，pp.332～337，1986
15）安藤美紀子・武井洋子：「高等学校家庭科ホームプロジェクトに対する意識（第１報）」，日本家庭科教育学会誌27.3，pp.20～25，1984
16）安藤美紀子・武井洋子：「高等学校家庭科ホームプロジェクトに対する意識（第３報）」，日本家庭科教育学会誌28.2，pp.21～25，1985
17）中屋紀子・佐藤淑子：「高等学校家庭科ホームプロジェクトの指導方法」，宮城教育大学紀要，第32巻，pp.215～226，1997
18）右田雅子：「島根県高等学校家庭クラブ活動の実態と課題」，家庭科教育74.4，pp.62～66，2000